經濟論叢

第110巻　第5号

哀　　辞
故松井　清教授遺影および原稿

産業コンツェルン……堀　江　英　一　1
創業利得と利益留保……高　寺　貞　男　27
不生産的階級と生存競争の組織化……池　上　　惇　41
GMにおける予想制度と基準価格制度の形成……小　野　秀　生　57
個人的消費と労働力再生産の社会的性格……成　瀬　龍　夫　78

記　　事
松井教授逝く
追悼講演（吉信 肅・森下二次也・山岡亮一）
追　憶　談（田畑茂二郎・杉本昭七・関下 稔・鈴木 明）
故松井 清教授略歴・著作目録

昭和47年11月

京都大學經濟學會

松井清教授の学風を偲んで

森下二次也

ご存じのとおり，故松井清教授の研究領域はきわめて広範にわたっておりましたが，わたくしはここで「商業論」というごくかぎられた分野での教授の学風と功績について申し述べ，教授を偲ぶよすがと致したいと存じます。

ただこのように限られた分野での教授のご活躍を振りかえってみようとする場合におきましても，というよりも，わたくしの発言がきわめてかぎられた視野にたつものでありますためになおさらのこと，教授のお人柄にからめて，その研究の基本的性格に触れておくことがどうしても必要であります。第1に，教授の学問を根柢から支えていたものは，人間にたいする深い愛情，とくに弱い者，しいたげられた者への温かい思いやり，これを裏がえせば抑圧者にたいする激しい怒り，人間らしい生活の破かい者への飽くなき憎しみであったといえるのではないかと思います。教授の研究が一貫してマルクス経

済学に基礎をおいていたこと，マルクス経済学に基礎をおきながら，たんなる訓詁的研究に満足せず，常に現実に眼をむけ，現状の科学的分析を志向してやまなかったのも，このことと無縁ではなかったといってよいでしょう。

第2に，これと深い関連があることと思いますが，教授は学問的にきわめて潔癖なひとでありました。個人的な交友関係では清濁併せ呑むといったようなところがありましたが，学問上のことにかんするかぎり些かの妥協も許されなかったのであります。教授が日本商業学会を中途退会されたのもおそらくそのためであったろうと思われます。

第3に，よく知られておりますように，教授はまれにみる天賦の才に恵まれた学者でありました。広い領域にわたって，あたらしい問題を適確につかむ鋭い感覚と，ひとたび問題をとらえるや瞬時にこれを処理する精密な分析力とをもって常に同学を先導されたのであります。この意味で教授の学問は先覚者の学問であったといっても過言ではなかろうかと存じます。

なおこれも知る人ぞ知る，教授は無類の淋しがりやであられました。「俺は孤独だよ」という言葉を，わたくしも何度か聞かされたのであります。この教授の孤独は，思うにさきに申しあげた教授の研究の基本的性格と一連のものであります。けだし愛情の反面は孤独でありますし，潔癖は孤高とうらはらであります。また先覚者は一般に即座の全面的理解を得ることの困難なのが常だからであります。

さてここで本題にたちかえって，商業論学者としての教授を語ることにしましょう。教授と商業論との出合いははるかに遠く，教授がまだ京都帝国大学の学生だったころ，故谷口吉彦先生のゼミナールに参加されたときにまでさかのぼります。同大学院ではやはり谷口先生のもとですでにアメリカのマーケティング論に親しんでおられるのであります。しかしながら，わが国のこの領域での研究の発展にとってまことに残念なことには，教授の関心はながくここにとどまらず，教授ご自身のお言葉を借りますと，ここから「貿易論へ，さらに貿易論から次第に世界経済論へ移ってゆき，現在わたくしの専門を聞かれたなら，世界経済論だと答えざるをえない」(『経済学とマーケティング』3頁)ということになるのであります。ところがいったん去ったかにみえた教授の関心は幸い戦後にいたりまして再びここに復ってまいります。教授のこの分野にたいする興味を再燃させる直接のきっかけになったのは，これまた教授のいわれるところによりますと，「帝国主義講座」のための「一般的危機下における商業・貿易史」の執筆であったのでありますが，その後さらに大学における講座および講義の関係もあって，この方面での研究をいよいよ本格化されたもののようであります。(『経済学とマーケティング』3頁，『商業経済学概論』自序)

ところで，みぎの論稿は，「帝国主義講座」の中止という事情があったため，別に書

き加えられた1章と併せて単行本として出版されることになりました。「独占資本主義下の商業と貿易」という副題をもつ『資本主義の一般的危機』(1950年, 三一書房)がこれであります。この書物は, もちろん教授の商業把握の基本的な姿勢をうかがわせるのに十分なものをもっているとはいえ, すくなくとも表面的, 明示的に教授の商業論の体系をここにみることはまだできないのであります。ですから, これを教授の商業論における業績のなかに位置づけてみるかぎりでは, むしろその後における輝かしい展開の出発点をなすものとして評価すべきであろうと思われます。

ここを出発点とする教授のこの分野での研究はおよそ3つの方向に展開してまいります。その第1は商業論の体系化であり, 第2はわが国の流通機構の分析であり, そして第3はマーケティング論の解明であります。まず第1の商業論の体系化についていいますと, その成果は1951年刊行の『商業経済学概論』にみることができます。本書は「商業経済論は商業を商業資本の運動として把えたとき 初めて科学という名に値する内容をもちうる」(同書, 自序)ものであるという基本的立場に立って, 商業にかんする理論と歴史と政策を綜合した壮大な体系を示したものでありまして, 今日なおマルクス経済学の立場から商業を学ぼうとするものの必読の書となっているのでありますが, とくに最初それが出版された当時は, 文字通り劃期的な研究として学界に大きな衝撃を与えたのであります。実際「商業・貿易等, いわゆる流通過程に関する研究は, これまでマルクス主義経済学における未開拓の分野に属する」(『資本主義の一般的危機』序文)といってよかった当時において, この書物のもつ意味ははかり知れないものであったのであります。ちょうど教授とおなじ頃, おなじような立場から商業論の体系化を志して四苦八苦していたわたくしは, この書物に接してまさに百万の味方を得た思いをいたしたものでありまして, その時の感動をいまなお忘れえないのであります。

つぎに第2のわが国流通機構の分析にかんするお仕事を代表するのは1952年に刊行された『貿易商社論』であります。教授ご自身は, 「本書は貿易論に関する私の4番目の仕事」であるといっておられますけれども, その内容からみてこれは立派な日本商業論であり, わが国の流通機構論であります。けだしそれは「商社という形を以て存在する商業資本の分析」を, またその前提としての「商品資本の社会的流通」の態様, つまりは流通機構の解明を意図したものであるからであります。(同書, 12—14頁)もちろんその際分析の武器になるのはさきに『商業経済学概論』で明確にされた理論でありますが, 教授は「理論がそのまま現実を説明するというような素朴な構造をもつものではない」(同書, 14頁)との立場から生産財部門では鉄鋼製品, 消費財部門では繊維製品を選んで, 現実に肉はくし, そこで法則がどのようにゆがめられているか, ゆがめられながら貫徹してゆくかを, 実証されているのであります。ここでもまた類書は稀れであります。

もちろん教授のこの業績に刺激されていくつかのすぐれた特殊研究がみられるようになっておりますが，基礎理論との斉合性において，構図の雄大さにおいて，教授の業績に比肩しうるほどのものはいまだみることをえないのが現状であります。

最後に第3のマーケティング論の分野における教授の業績としては1964年に刊行された『経済学とマーケティング』をあげることができます。「経済学，とくにマルクス経済学の立場から，マーケティングやマーケティング論をいかにみるべきかということをライト・モティーフとして書かれた」（同書，6頁）本書において教授はまず，いわゆるマーケティング論が「国家独占資本主義の下における企業活動の主体的論理」であり（同書，247頁），そしてそのようなものであるかぎり，それは「客観的法則を内容とする『理論』ではありえない」こと（同書，221頁）を完膚なきまでに暴露されております。さらに教授はマーケティングを経済学の研究対象としてみた場合「それは単なる商業資本の運動ではなく，国家独占資本主義のもとにおいて，『計画化』を要求された，生産過程に機能する資本をも含んだ個別資本の運動」としてとらえなければならないものとされ，その運動の各局面に相応する企業のマーケティング諸活動の解明に努めておられるのであります。ただこの部分については，さきの批判的部分ほど叙述が完璧であるとは正直いって申しあげられないのであります。珠玉のような示唆が随所にみられるのでありますが『商業経済学概論』や『貿易商社論』のような完成された体系をここに求めることはできないのでありまして，それが，教授が本書は「わたくし自身にとっても一つの入門書である」（同書，6頁）といっておられる所以であろうかと思われます。

つまりマーケティング経済論の体系化はなお後日の課題として残されたわけであります。不幸にして教授の多忙はその実現を妨げたのでありますが，教授の関心はここを放れたわけではありません。現にこの春，わたくしが名目上の監修者となり，教授門下の若いマーケティング研究者が中心となってまとめあげた『マーケティング経済論・上巻』にたいして，教授は御渡欧前の多忙のなかにありながら，早速懇切な書評を寄せて下さったのであります。そのなかで教授はさらに下巻の成果に期待するといっておられます。にもかかわらずわたくしたちはこれを生前教授におみせすることができませんでした。返えす返えすも残念であります。いまはただ教授が心を残されたにちがいないこの分野での研究を一歩でも二歩でもおし進めることが，われわれ後進にとって，教授の学恩に報いうるただ一つの途であろうかと存じます。改めて教授の御霊前にこのことをお誓い致します。